



日本学術会議公開シンポジウム

「若手研究者をとりまく評価－調査結果報告と論点整理－」

報告

日時：2022年10月6日（木）13:00-15:30

場所：Zoom ウェビナー+Youtube ライブ配信

主催：日本学術会議若手アカデミー、若手アカデミー地域活性化に向けた社会連携分科会

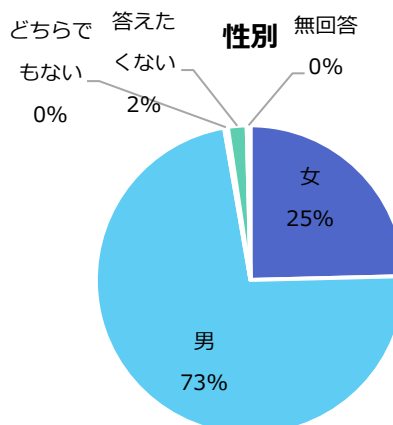
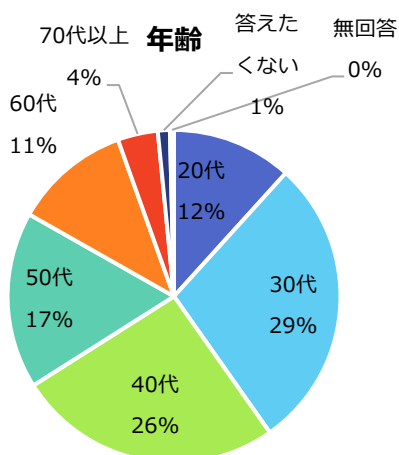
開催趣旨：世界的な競争、評価をめぐる問題、キャリアパスに関する課題など、若手研究者をめぐる研究・知識生産の環境は多くの課題を抱えている。安定的な活動基盤の獲得のために、時にチャレンジングな研究の回避、あるいは評価指標を過度に気にした活動などの弊害が指摘され、知識生産の可能性を損ねていくことが危惧されている。日本学術会議若手アカデミーでは、2022年6月から7月にかけて「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」（Web アンケート）を実施し、全国の多くの若手研究者に回答いただいた。本シンポジウムでは意識調査の結果を報告するとともに、若手研究者をめぐる評価のあり方について幅広い視点から議論し、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に向けた論点整理を行う。

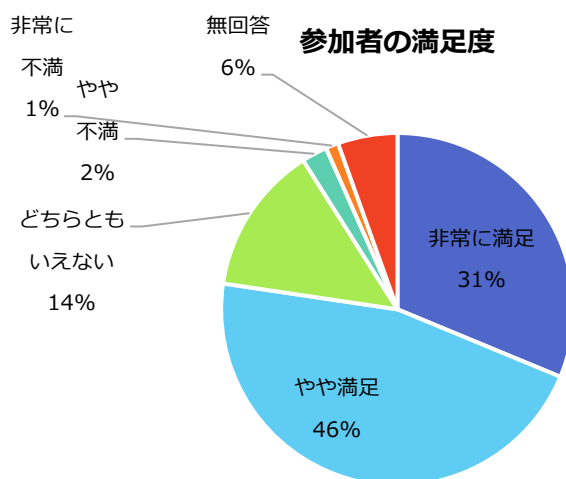
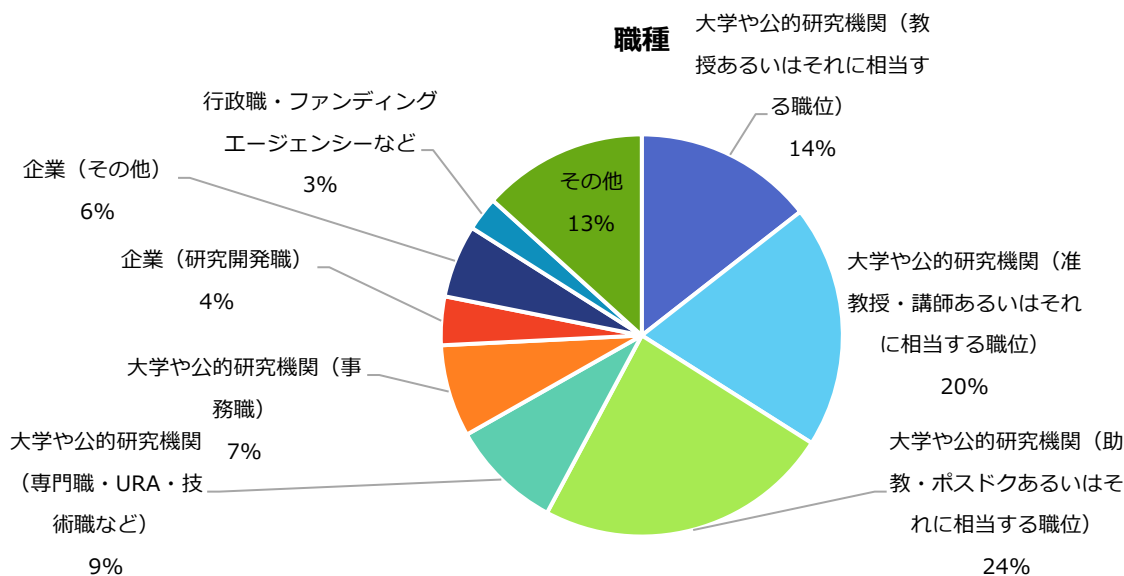
プログラム詳細：<https://www.scj.go.jp/ja/event/2022/330-s-1006.html>

アーカイブ配信：<https://www.youtube.com/watch?v=K-1LopyVwQ0>

参加者数：627名（ウェビナー584名+Youtube ライブ配信43名）

アンケート結果（回答256件）





岩崎若手アカデミー代表の開会挨拶では、評価こそ社会や組織を変える本質であり、評価のあり方を個人的な経験ではなく分野や立場、属性などを超えて議論していくことの重要性がメッセージとして伝えられた。小野若手アカデミー幹事の趣旨説明では、意識調査の結果を共有した上で、課題や論点を幅広い視点から議論し、全体像を共有することが本シンポジウムの目標であることが説明された。

標葉若手アカデミー会員による「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」結果報告では、約8,000名の若手研究者の回答結果から、評価が不十分ではないかという懸念、研究以外の仕事を減らして研究のための時間に振り分けたいという意向が明らかになった他、分野やキャリアによる評価、教育・地域連携の評価など、評価の多様性を考慮する必要性を示唆する結果が報告された。

続くパネルディスカッションでは最初に5名の登壇者から話題提供が行われた。服部神戸大学准教授

から経営学の視点で、江端東京工業大学教授から研究環境の視点で、加藤若手アカデミー会員からライフプラン・キャリアパスの視点で、塚本富士フィルム株式会社技術マネージャーから産官学人材流動の視点で、新福若手アカデミー会員から国際の視点で、若手研究者評価についてそれぞれ話題提供いただいた。後半のフリーディスカッションでは、まず「なぜ評価するのか」という本質的な問いが投げかけられ、有限なリソースの配分、教育、ベクトル合わせ、という3つの機能があることが示された。そして「なぜ定量的評価に依存してしまうのか」という問いに対して、分かり易さ、測り易さ、が理由として挙げられた一方で、定量的評価には限界があり、世界的には質的評価への揺れ戻しが起こっていることが紹介された。そして「測る」と「測らない」の二者択一ではなく、組織としてミッションを掲げつつ「測る」ことを最小限にするといった方法もありえることが議論された。さらに評価の多様性という観点では、世界的なオープンサイエンスの潮流の中で、新しく公共財となるもの（公知化）という軸での評価が重要ではないかという議論が行われた。最後に、評価に対して適応的な行動をとりがちではあるが、何を評価してほしいのかセルフアピールの大切さも指摘された。

望月日本学術会議副会長の閉会挨拶では、よりよい知識生産のため、若手に限らずシニアも含めて継続して議論していくことが重要であるとのコメントがあった。



シンポジウム登壇者等

本シンポジウムは 627 名の方にご参加いただきました。終了後のアンケート結果より、参加者の年齢は 20 代～40 代が 66%を占めるなど若手が多いながらも中堅・シニア層の参加も多くみられた。職種では大学や公的研究機関の研究職が 58%を占め、大学や公的研究機関の専門職や事務職、企業、行政・ファンディングエージェンシーなど幅広い職種の方にご参加いただきました。また「非常に満足」と「やや満足」が合わせて 77%と概ね高い満足度が得られた。

シンポジウムに参加した理由として、「アンケートに回答したから」、「自身のキャリアパスについて考えたかったから」、「自身を取り巻く状況が知りたかったから」など若手研究者からのコメントのほか、「教員個人評価の業務を担当しているため」、「適正な評価の方法、あり方が知りたかった」など評価に業務として関わる方または関心を持つ方からのコメント、「若い研究者の考えを知るため」、「若手研究者の置かれている状況を把握するため」、「若手研究者を育成する仕事に携わっているため」など若手研究者の考えや状況を知りたいという方々のコメントも多く見られた。

もっと掘り下げてほしい内容として、「多様な評価と負担軽減の両立」、「評価の透明性・公平性」、「シニア研究者や官僚がこうした問題をどのように捉えているのか」、「研究者評価が組織でどのように利用されているのか」、「大学の組織としての評価と、研究者個人としての評価をどのように切り分けて考えるか」、「ライフイベントとキャリアについて」、「メンターや URA による伴走型支援」など、今後に向けた意見が多く寄せられた。

今後も知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成を目指して、意識調査の結果、本シンポジウムでの議論やアンケート結果の内容を踏まえて、大学や研究機関、学協会、政策担当者をはじめ広く社会と継続的に対話・取り組みを行っていく。

(報告者：小野悠・若手アカデミー幹事／豊橋技術科学大学)

※次ページ

(グラフィックレコーディング：名畑恵・NPO 法人まちの縁側育くみ隊 代表理事)

「若手研究者をとりまく評価 - 調査結果報告と論点整理」 13:00~15:30

1 はじめに



- ① 評価その社会組織を変える本質
 - ② 分野横断で違い共通するものを同体として提言できる評価
- 良い評価をいかに作る
シンポジウムへ



目的 幅広い視点からの若手研究者をとりまく評価、整理を

ポイント 若手に限らず、より良い研究環境につなげていくために継続

4 おわりに

よりよい知識生産のための評価



望月 遥弓
シンポジウムも継続的に

ファシリテーター



近藤 康久



岸村 顕広

新しい知識生産
村とこえることが研究

2 報告

「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」

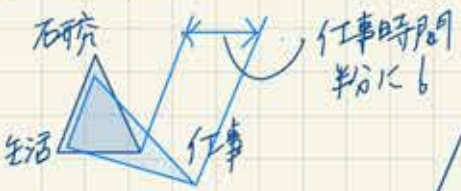
現在 vs 理想



榎葉 隆馬

- ① 評価面が不十分 → 多様性の議論へ
 - 教育面が評価面が低い
 - 分野の選別 ○ 地域社会の役割
 - 予算獲得が評価面が低い

② 研究環境



③ キャリアパスとライフプラン

博士号取得前後 ecc
女性に影響を受けやすい

3 パネルディスカッション

経営学から
服部 泰宏



- ① インセンティブ
 - ② 人材育成
 - ③ 直道評価機能
- 優秀さの中味
若手も評価する
「評判」も



ライフプラン・
キャリアパスから
加藤 千尋

キャリア初期とライフイベントが重なりやすい
若手研究者の
キャリア面は

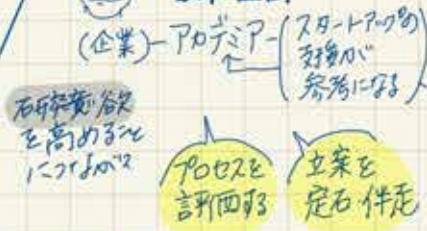


研究環境から
江端 新吾

TLU・URAなどの伴走者が重要
大学経営の立場から
若手研究環境を
大学レベルのセグ設計から



産官学人材流動から
塚本 直樹



国際から
一つの数値評価 → クオリティへ

ローカル
研究のコースに
合わせた

・ 単国や
・ ソーシャル流動性も
↓
本若手活躍の

▶ DORAへ
・ 対話・スローでも

何のための
評価面か?

環境に
ついて

多様性
について

評価面が大事
定量的評価(はかりやすい)
限界があること知りの
免状 → センティメント

どう使うかの
大事

大学単位で
とくま
のが大切では?

地域社会と研究の見える化(小野)

* オープンサイエンスの潮流
公共員となるものへの評価
データベース構築など(榎葉)

自分で評価面を語ること
セルフPR